

ESSAY  
エッセイ

クラシックは面白い — その 8

## ピアノのお話 I

今年は南フランスの古都トゥールーズのピアノの祭典が御当地で見られることになりました。まちがいなく、いまのクラシック音楽の楽器の王者はピアノです。

しかしピアノという楽器の歴史はそれほど古くありません。バッハ、ヘンデル、スカラッチィ、クーラン、ラモーなどはそれぞれにすばらしいピアノ曲を書いたように見えますが、この人たちの使った楽器はピアノではなくチェンバロ（イタリア語）とかクラヴサン（フランス語）、ハープシコード（英語）とか呼ばれる楽器で、鍵盤のあるところが、一見してピアノに似ていますが、実は全くちがう発音機構を持った楽器なんです。ピアノは鍵盤を押せば、ハンマーという白い塊りが飛び上がって鉄の弦を打って音を出します。チェンバロ系の楽器では鍵盤を押すと、小さな爪が弦を（ギターのように）爪弾くようになっています。従ってピアノのような大きな音は出ません。弱音と強音のちがいもわずかです。音が小さく、強弱の差が少ないという弱点を改良し、表現力豊かな楽器に作り変えたのがピアノです。（ピアノという呼び名はイタリア語で弱音のことですが、あんなに大きな音のする楽器のことを弱音と呼ぶのは変じゃないか？ そうです。これが発明されたときの呼び名は“弱音も強音も出るチェンバロ”だったのですが、その呼び名が長過ぎるので“弱音”と呼び慣らされるようになってしまったのです。）

最初にこの打弦の仕掛が発明されたのは 18 世紀の初頭のことでしたが、実用化するのはいそれより半世紀以上もあとのことで、モーツァルトの後半生がその時期に当たります。つまりモーツァルトのザルツブルク時代の使用楽器はチェンバロで、ウィーンでの最後の 10 年あまりはピアノを使っていたと思っています。

ベートーヴェンのほとんどのピアノ曲はピアノのために書かれていてチェンバロ用ではありません。彼は最初からピアニストでありました。しかし、モーツァルトやベートーヴェンの頃のピアノはまだ未完成で、鍵盤の数も少なく音も今日のような大きな音は出ませんでした。19 世紀に入って工業技術が発達すると、現代のピアノのように鉄の骨組みの上に鉄の弦を張ったピアノが作られるようになりました。1830 年代のことです。1830 年というとショパンやシューマンは 20 歳、リストは 19 歳ですから、これらロマン派の名ピアニストたちは、現代のピアノとほぼ同じ水準のピアノを弾き、そのピアノのために音楽を書いたのでした。実はそれ以後、ピアノはそれほど大きな進化を見せず、今でもリストの弾いたというエラール製の楽器が残っていて実用に耐える性能を持っています。（つづく）

執筆／石井 宏（音楽評論家）

1930 年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004 年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』（新潮社）で山本七平賞を受賞。

薔薇色の街がピアノに染まる。世界でもっとも美しい音楽祭。

## ジャコバン国際ピアノ音楽祭 2017 in 岐阜

2017. 6/17(土) サラマンカホール

**マチネの部** 開場 13:30 開演 14:00 ※12:30 より入場整理券（お一人様1枚）を配布

〈全席自由〉一般 1,500 円、学生 500 円、アペチケセット（ドリンク&フード付）2,400 円

14:00 ~ 15:00 中桐望 「ショパンを弾く！」

15:30 ~ 16:30 ジャン＝バティスト・フォンルー 「リストを弾く！」

17:00 ~ 18:00 ダナ・ツィオカーリ 「シューマンを弾く！」

**ソワレの部** 開場 18:20 開演 19:00

〈全席指定〉S 席 3,500 円、A 席 3,000 円、学生半額（30 歳まで）

19:00 ~ 20:30 仲道郁代 「ベートーヴェンを弾く！」

チケット  
発売中

19歳生誕 岐阜県大野町産  
バラ苗鉢  
プレゼント!  
〈マチネの部〉鑑賞  
先着 100 名様



中桐望



ジャン＝バティスト・フォンルー



ダナ・ツィオカーリ



仲道郁代